

この熱「様子見」で大丈夫？

在宅で出会う 「なんとなく変」への対応法

家研也 編

本体2400円＋税

医学書院 ☎03-3817-5600



本書は、訪問看護におけるフィジカルアセスメントだけの本ではありません。いかに多職種でチームとして動くか、そのために何が必要か、そして訪問看護を通して人が成長するプロセスまでが見えてきて、途中で「この本のタイトルって何だったの？」と思うのです。

新人のときに欲しかった1冊

私が訪問看護の世界に入ったのは、今から15年前です。介護保険が始まって2年ほど経っていました。まだ在宅療養支援診療所の数も少なく、主治医のほとんどは大きい病院か町の診療所の医師でした。訪問先で悩み、迷っても、気軽に

報告・相談ができる存在ではなく、スマートフォンがない時代ですから、その場でインターネットで検索することも叶いませんでした。「あの判断でよかったのだろうか」「あの人は穏やかに眠ることができているだろうか」など、モヤモヤしてしばらく眠れない夜が続きました。そのような夜をふり返り、「15年前に本書があったらなあ」と思わずにはいられませんでした。

表紙を開くと、スタンダードな肺炎の事例から始まります。そこでは、この本で一貫して書かれている「まずは何よりバイタルサイン——忘れちゃいけない呼吸数」の重要性が説かれています。

Dr.修造 忘れがちだけど、呼吸数はとっても大事ですよ。呼吸状態が悪くなると、身体は呼吸数を増やすことで体内の酸素濃度を維持しようとして、だからサチュレーションが保たれていても、呼吸数を数えなくては評価できないのです。

実際のところ、現場では呼吸数の測定が軽視されがちです。呼吸数は加齢の影響を受けないといわれており、本来はどの現場でも必須だと思いますが、研修等で「呼吸数を測っていますか？」と質問しても、手を挙げるのは100人中2、3人ということがほとんどです。器械は

軽量、小型化し値段も安くなり、在宅医療の現場でも多用され便利になりました。しかし、器械の出す数値に頼り、自分たちの「何か変」という直観や急変のにおいをかぎ分け、判断する力を育む機会を失っているように感じてなりません。

看護師の直観力を育む

本書では、在宅でのさまざまな「何か変」を、Dr.修造とNs.ひろみさんのやり取りを通して言語化し、その評価と対応、医師へ報告すべき内容が具体的に示されています。随所にあるmemoや図表には簡潔かつ多彩な情報があり、事例を包括的に多角的に考えることにつながります。

後半には、コミュニケーションや多職種カンファレンスの進め方、時に倫理の視点などが織り込まれ、単なるフィジカルアセスメント本にとどまりません。

本書は、現場ですぐに使うこともできますが、1日の終わりに手にしながらリフレクションすると、見てきたことや経験したことの意味を考え、次につながる力をつけることができるのではと感じました。ベテランの訪問看護師の方も、そしてこれから訪問看護師になる方も、できれば急性期の看護師の方にも、ぜひ傍らにおいて随時開いてほしい1冊です。